

スーヴィンのノーヴムとその機能

高橋史朗*

On Suvin's Novum and Its Functions

Fumiaki TAKAHASHI*

Abstract

The novum is one of the most significant concepts in Darko Suvin's "poetics" in that it provides the logical foundation for the framework of cognitive estrangement. However, delineating its functions has been a controversial topic as Suvin himself admitted. In this brief paper, we will examine several important discussions on the functions of the novum and cognitive estrangement with a particular emphasis on the problems lying between science fiction and scientific progress, modernity and capitalism. Closely reviewing both Suvin's theory and objections to it, we will reconfirm the dialectical character of science fiction as a literary genre.

Keywords: SF [Science Fiction], Novum, Darko Suvin, Cognitive Estrangement

I.

ダルコ・スーヴィン (Darko Suvin) とその SF の定義に関する諸問題は、ファンタジーあるいは自然主義文学と SF を弁別するためのパラメーターである認識的／非認識的、異化的／自然主義的という二つの二項対立と、それを成り立たせるノーヴム (新事象: novum) に関する議論に集約される。とりわけノーヴムについては、トム・モイラン (Tom Moylan) が指摘するように、大きな批判の対象となってきた¹。本稿は、そのノーヴムとは何か、それが SF において果たす役割を考察するものである。

スーヴィンが SF におけるノーヴムの機能にまとめて言及したのは、1977 年のことであり、1979 年には主著である *Metamorphoses of Science Fiction* の第 4 章「SF とノーヴム」に再掲された²。ノーヴムは SF の「共通分母」であり、スーヴィンのジャンル論は、これを SF と他を弁別する最小のジャンル上の差異とすることを

前提とし形成されている (3)。ノーヴムは認識的異化に先行する批評上の基盤であり、換言すれば、スーヴィンのパラメーターはノーヴムを欠いては成立しない。「SF が他のジャンルと区別されるのは、認識的論理に裏付けられた虚構的ノーヴムが、物語において支配的もしくは優位を占めている点にある」ことを「公理」としなければならないのである (63)。

ノーヴムの定義とその機能が、第一義的に、スーヴィンのジャンル論のエッセンスである認識・異化との関連性において述べられるのは当然である。例えばスーヴィンは、ノーヴムを仮定する際に基礎となるもの、またその有効性の裏付けになるものは、デカルト、ベーコン以降の「科学的方法である」と述べて、SF におけるノーヴムは認識的でなければならず、同時にその認識性を付与するのは科学的方法論であることを強調する (64-5)。エルンスト・ブロッホ (Ernst Bloch) からの借用語であるノーヴムは、第一に「認識上の革新」であり、スーヴィンは SF におけるそれを「作者の現実規範ならびに内包された読者 [implied reader] の現実規範

平成 20 年 12 月 15 日受理

* 感性デザイン学科・准教授

のいずれからも逸脱した一全体的ですべてをまきこむような一現象もしくは関係」であると再定義する(64)。そしてノーヴムの存在によってSFは、「世界全体の変化を、あるいはすくなくともその世界のとくに重要な局面の変化を描くという意味で、『全体的視野』をもつ」ことができるのであり、

その結果、読者―すなわち私たちの時代に特有の<人間>像の諸タイプの代表―と、革新性によって導入される包括的ですくなくともあなどりがたい<未知>もしくは<他者>とのあいだに、SFの本質的緊張関係といえるものが生ずる。そしてこの緊張関係は、次に返す刃で、内包された読者の抱く、経験的規範を異化してしまう…(64)。

とスーヴィンは主張する。つまり、ノーヴムこそSF固有の異化作用の根源なのであり、かつまた、SFを自然主義あるいはファンタジーと峻別しようとするスーヴィンのパラメーターは、ノーヴムの存在を前提としている。

スーヴィンのジャンル論に対する批判が、ノーヴムに力点を置くことが少なからずあるのは、このようなノーヴムの重要性に加えて、ノーヴムの定義、機能が必ずしも明快ではないためである。例えば、スーヴィン自身が認めるように、「作者の現実規範ならびに内包された読者の現実規範のいずれからも逸脱した…現象もしくは関係」をノーヴムと呼ぶのであれば、「詩的なメタファーはどれもノーヴム」(64)といえる。もちろん、この主張には、前掲したようにSFのノーヴムは「全体的ですべてをまきこむような一現象あるいは関係」でなければならないという条件があるので、無制限にあらゆる詩的メタファーを含む作品がSFであると述べているわけではない。第一それでは、すべての言語表現がSFになってしまう。しかし、スーヴィンの主張が曖昧であることが、SFの定義に対する多様な解釈の原因の一つとなっていることは否定

できないだろう³。

また、SFにおけるノーヴムの正当性は必然的に科学(とテクノロジー)およびその認識性に負うところが大きいことも論議の対象となっている。前述の通り、スーヴィンはノーヴムの基盤をデカルト・ペーコン以降の科学的方法論に置いている。換言すれば、SFは作家、作品と読者との間に古典的な科学的方法論が共有されていることを前提としている。わざわざ古典的という表現を挿入しなければならないのは、進歩、客観性、再現性といった概念が、否応なしにSFに導入されるからである。例えば、未知のエネルギー源を利用した恒星間の移動といったアイディアには、未来における科学技術の発展の妥当性が前提に存在する。未来にはそのような技術が開発されていたとしてもおかしくはないと―その科学と技術の発展の過程／仮定は認識的であると―考えること、および、そのような思考が作者・作品と読者に共有されていること、それがSFの前提である。作家と読者が、未来における科学技術の進歩という概念を、ある程度無条件に了承することが求められているのである⁴。ポスト構造主義以後の進歩に対する思想の変化は、当然のことながら、このような前提を当然視することに懸念を表明することになる。モイランが指摘するように、その背景には、1980年以降の新保守主義的傾向が強まる中で、「科学的分析、全体性、あるいは、階級闘争といったカテゴリーを無批判に受容してきたオーソドックスなマルクス主義の伝統」が厳しい批判にさらされたことが挙げられる。たとえそのようなポスト構造主義的な修正が、左翼の言説、分析、実践に対する批判的(critical)でも弁証法的でもない極めて断罪的な反応であったとしても、SFの歴史性は、左右に揺れ、かつ、評価を上下させてきたといえる⁵。

しかし、われわれが検討すべきなのは、ノーヴムの機能であって、その存在の有無ではないことに注意すべきである。これらの批判はいずれもノーヴムの存在を否定してはいない。SF

が他の近接する諸ジャンルと相違／類似しているのは、ノーヴムが存在するためである。SF はノーヴムが存在しない限り、自然主義的諸作品と弁別することはできない。例えば、アーシュラ・K・ル＝グイン（Ursula K. Le Guin）は、ヴァージニア・ウルフ（Virginia Woolf）のあらゆる小説は人物を描くものであるという主張に賛同し、ウルフが言う特別ではない人—ミセス・ブラウン—を SF は描くことができるという。「SF の作家が人間を描く小説家でもあらうとすることは、…賢明であり、望ましいことなのか」という問いに、ル＝グインはイエスと答えるのである⁶。つまり、SF は、一少なくとも望ましくは一人間を描くことを自然主義の文学と共有するのであって、優れた SF 作品を仮定するとき、その主題、あるいはスーヴィンがあらゆるところで主張するようにその手法、すなわち認識的な叙述で物語を構成するということにおいて、それを自然主義文学と弁別することはできない。一方、ノーヴムは非現実的な物語世界あるいは状況、精神的環境を提供するという点で、SF のより非認識的なジャンルへの近接性を生成している。パトリック・パリンダー（Patrick Parrinder）が指摘するように、スーヴィンの「SF 観では、ファンタスティックなものをコントロールすることが枢要」となっているが、それでもなお、SF の「ファンタジー、神話、おとぎ話との近似性は、それらとの分離に先行する」のである⁷。ノーヴムには確かに、相反する二つの役割があるが、矛盾的性格を有しているだけであり、その存在に疑問をはさむことはできないだろう。

II.

それでは、SF のジャンル論におけるノーヴムの主たる機能とは何か。再度スーヴィンの理論をたどることから始めよう。ただし、前述したように SF におけるノーヴムは、単に未知の新しい事象というだけでなく、認識的論理に裏

付けられていることには、常に注意が必要である。スーヴィンが換言するところによれば、SF とは「認識的に裏付けられたノーヴムを有する虚構」（68）であり、そうではないノーヴムは、定義的に SF に存在しない。このような前提の下、スーヴィンが主張するノーヴムの第一の機能は、「SF の叙述法（narration）の決定要因」となることである。

SF 物語とは…ノーヴムが主導的、すなわち、中心的で重要であり、かかるが故に、存在し得るどのような破綻にもひるまず、物語の論理全体—あるいは少なくとも物語の主要な論理—を支配している虚構なのである（70）。

この論理は、幾分かの修正が必要かもしれない。スーヴィンの主張には、定義としてのノーヴムの機能と、特定の SF 作品の優劣を判断する際に、作品内でノーヴムがいかに機能しているかといういわば評価対象としてのノーヴムが混在しているからである。しかし、SF 物語の極めて枢要な構造を提供するということが、スーヴィンの考えるノーヴムの第一の機能であることに変わりはない。

第二の機能は、とりわけ自然主義的小説との弁別に寄与するものである。そして、その機能には異化との強い関連性が見出される。

虚構の出来事を常に構成するのは、作者の文化規範に束縛される意味の場の侵犯である。ノーヴムはその境界を超える運動を強化し過激化する。「自然主義的」小説では、境界侵犯は類像的 [iconic] で同型的 [isomorphic] だ。この場合、文化規範の侵犯は、文化規範の侵犯でしかない…。ところが SF では、すくなくともその中でも決定的な意味を持つ出来事においては、境界侵犯は類像的ではなく異形的 [allomorphic] だ。この場合、文化規範の侵犯は、単なる文化的・存在論的規範の侵犯以上のものによって表現される。もしくは、キャ

ラクターあるいは行為者 [agents] が時間あるいは／および空間的に位置をずらされることがやその人物の周囲で現実自体が変化することが原因となる存在の変化によって表現される。斬新さ [novelty] が SF 物語特有の存在的 [ontolytic] 効果に資するものであるというのが、思いつく限りの適切な表現だろう (70-1)。

ノーヴムは、作者の現実における経験的諸原則の妥当性を身にまといつつ、一方で、それらからの逸脱を保証する。この奇妙なオキシモロンの性格によって、読者は SF 特有の「フィードバックする往復運動」を行うことになる。それは、SF のプロットや出来事を理解するための視点の移動といってもよい。読者は、まず「作者の現実規範や内包された読者の現実規範から、新たに物語によって実現したノーヴムへと」視点を移行する。しかし、SF は認識的であるから一別言すれば自然主義的であるから一、必然的に作者あるいは読者の現実を描いている⁸。それ故、読者は「新たに獲得されたパースペクティブによって現実そのものを新鮮な目で見直すべく、現実の方に帰ってくるという運動」を行うことになる。この往復運動こそ異化、すなわち「あらゆる詩的・劇的・科学的、要するに意味論的ノーヴムの、その必然的帰結」(71)であるとスーヴィンは主張する。ノーヴムの存在は、SF における異化の原動力となっているのであって、自然主義的諸ジャンルとの弁別がこの点に仮定されている以上、SF のノーヴムは自然主義との弁別特性である。

ノーヴムの第三の機能を理解するためには、SF ならびにその創生 (科学的思考方法の確立) 以前の関連する物語における、未知の世界への到達方法について概略を述べる必要がある。トマス・モア (Thomas More) の『ユートピア』(Utopia) に代表される異郷譚の歴史を振り返ると、古い作品の多くがなじみのない土地・空間を単純に同時代の未知の辺境、とりわけ島に位置づけていた。しかし、19 世紀以降未知なる

トポスとはもっぱら時間的未来に求められることとなる。この傾向が大きく変わるきっかけを、クリシャン・クマー (Krishan Kumar) は二点あげている。その第一は、進歩の概念の理論的發展、すなわち、ベーコン (Francis Bacon) の科学思想、カント (Immanuel Kant) やヘーゲル (Georg Wilhelm Friedrich Hegel) の歴史哲学、ロック (John Locke) 等によるヒューマニティーの発展性の発見、コンドルセ (Marie Jean Antoine Condorcet) の未来観の影響であり、第二は、メルシエ (Louis Sebastian Mercier) が『2440 年』(L'An 2440) でユートピア社会を初めて未来に位置づけたことである⁹。このうち、後者はユートピア物語の発展に関して重要ではあるが、SF の歴史的発展については、前者こそ枢要であろう。なぜなら、それがスーヴィンの言う二つの理由と史的関連性を共有するからである。スーヴィンは、こう述べている。

SF の空間から未来へのシフトは、世界地図から空白地帯が枯渇したという単純な理由だけで起こったのではない。むしろここで重要なのは、次の二つの要因の相関だろう。ひとつは、同一空間内に別世界をつくる物語上の工夫が厳格な実証主義のイデオロギーによって息の根を止められたこと。もう一つは、給与、利潤、進歩的な理想が常に未来の時間にあるのだと期待される資本主義経済にもとづく生活の中であって、時間軸に沿う外挿法に向かう傾向が強まったことである (72-3)。

すなわち、科学主義、啓蒙主義、そしてとりわけ資本主義が SF の物語世界を未来へと位置付けることに貢献したのである。これらの思潮の発展が、他のジャンルにも影響を与えているのは当然であるが、SF はこれらとの直接的関連性が他のジャンルと比較にならないほど強いのである。例えば、すでに述べた第一および第二の機能が、科学主義と密接に関係しているのは明らかであろう。また、下に述べる第四の機能

は、啓蒙主義との結びつきが背景にあると考えられるであろうし、SFの資本主義的性格およびそれに対する批判については、次章で詳しく検討する。

さて、使いにくい単語をあえて用いれば、ノーヴムの第三の機能はモダニティとそのテクスチャーをSFに導入することである。新奇であるという点で、ノーヴムは常に歴史性を帯びている。それは、これまでにない何かであり、これまでにない想定できなかった何かである。つまり、ノーヴムの背景には、多くの場合発展する—あるいは衰退する—人類の文化という概念がある。科学がSFを始動させる動因(67)である以上、科学主義的進歩観がSFには付きまとう。未知の地平を未来に置くことは、それを強化する。同時に、SFは資本主義のイデオロギーにとってもすれば圧倒される危険性をはらんでいる。スーヴィンが手厳しく非難する願望充足的センセーションナリズムに過ぎないSF作品は、それが無批判な未来予測であるという点で、上昇する賃金の比喩となるのは明白だ。もちろん、同時に人間を描くことが不十分である場合、新奇な仕掛けも単なる消耗品となる。

スーヴィンの主張するノーヴムの第四の機能は、SF特有の時空間＝クロノトポスを提供する(78)ことであり、これは当然ながら第三の機能と密接に関連している。つまり、後者の語りの面についての詳述であるといえる。しかし、それと同時に、ギリシャ以来の伝統である文学の啓蒙的側面が示唆されている。経験的規範の異化がSFを読むという体験において、目的論的に論じられている以上、SFはある意味で教育的である。「未来学」としてのSFという意味ではなく、あくまでも現実の経験的規範をあらためて見るための視点を提供するという意味において。それ故、スーヴィンは、優れたSFの典型的なプロットに、何も知らない主人公が徐々にノーヴムを理解するに至る過程を描くという教養小説(education novel)の構造を見出すことができる(79)。SFは、作者ある

いは内包された読者の現実に対する新たな視点を提供する可能性があるという点で、優れて啓蒙主義的なジャンルなのである。

III.

スーヴィンのノーヴムの機能に対する批判は、先に触れたように多岐にわたる。しかし、現在の批評の趨勢、とりわけポスト構造主義以後、モダニズムとの関連性においては、重要な批判がいくつかに集約されている。その第一は、進歩と資本主義的歴史観に関する諸問題である。SFのノーヴムは定義的に「新しい科学的成果」でなければならず、そのために多くの場合、「科学が進歩した」未来に物語が投影される。そこには、進歩というものに対する無批判性、すなわち、資本主義的な未来観が介在しているかのように思われる。

もちろんこの問題について、スーヴィン自身が無自覚であったわけではない。例えば、すでに*Metamorphoses*において、「未来学的な外挿を売り物にする(extrapolative)SFは、テクノクラシーのイデオロギーをまき散らすだけのまやかしに過ぎない」(76)と主張していた。スーヴィンにとって、未来社会を映し出すことは、SFの「二次的」な機能に過ぎず、「未来予知物語を含むすべてのSFは、作者の現在にアナロジーを介して差し戻されること(analogical reference to the author's present)に認識論的価値が見出せるのである」(78)¹⁰。優れたSFが提供する世界は、作者の属する現実のアナロジーであり、「それが(経験論的に実証できないという意味で)どれほどファンタスティックであろうと、描かれる人物なり世界は常に『寓話の様式で語られる私たち(*de nobis fabula narrator*)』なのだ」(75)というスーヴィンの主張は、優れたSFにおいては、直接的な未来予測やそれが提供する「センス・オブ・ワンダー」はあくまでも副次的に過ぎないのであって、進歩を前提とする資本主義的思想は、むしろ排斥さ

れるべきものであることを示している。

しかし、そうであるからといって、ノーヴムの進歩に対する盲信的危険性が排除されたわけではない。重要なのは、作品がどれほど進歩という概念を対象化しているかという点にある。スーヴィンにおいてノーヴムは、SFを無批判に提示される進歩の流れ—あるいは結末—におくものでは決してない。従って、スーヴィンは、「歴史にはいかなる終わりもない」ことを強調し、歴史の終点であるかのようなSF、彼の言う静的なユートピア（ディストピア）を強く批判する。

SFが意義深く、真の妥当性をおびるようになればなるほど、SFは明らかに最終的な解答を避けねばならないだろう。たとえ最終的な解答が、プラトン・モア的な静的なユートピア・モデルであっても、たとえそれが、もっと人気のあるハクスリー・オーウェルのディストピアか、もしくはそれに類する「黙示録」の変異体であっても（83）。

モイランが指摘するように、スーヴィンはこの点について、*Metamorphoses* 以後に論考を深めてきた。1979年に発表された論文に、そのエッセンスを見いだせる。

あらゆる文学は、人間関係に光を当てて、それによって、より思い通りになるようなまたより喜び多い共同の人生へと通じる極と、人間関係から光を取り去って暗くしあるいは秘密めいたおどろおどろしいものに変えて、より困難な人生へと通じる極の2つを持つ連続体の中に存在する。SFはその語りを、新奇さ（novelty）が歴史的に決定され批判的に価値を判断されるような、可能な（possible）新しい関係性についての探求をめぐるよう位置づけることによって、自らをこの解放と束縛、自己管理と階

級疎外からなる一般的な2者択一関係の中に配置する。それゆえ、SF—歴史によって構築され歴史の中で価値づけられる—の理解は、歴史とその可能性についての感覚、このジャンルは社会的歴史の過程の中で変わりゆくシステムであるという感覚なしには、まったくありえない¹¹。

確かに、ノーヴムはSF作品を歴史の中に位置付ける。しかし、その歴史は常に「可能性」なのであって、それが何かしらの決定的な方向性を有しているのではない。むしろ、ノーヴムは決定された未来を拒否する。完全に予定化された未来—例えば2012年にオリンピックが開催されるといったこと—は、ノーヴムではない。新奇さの歴史的決定性とは、SFにおいてノーヴムに位置づけられる何らかの事象や状況が、それが現実化される可能性について認識的な説明が歴史的に存在することを指し、また、それに対する価値判断は、それが実現するかどうかかわからないことであるが故に、批判的に行われなければならないのである。テクノロジーが進化した未来をSFが描くということは、その実現を疑問に付すことに他ならない。未来を描く物語としてのSFは、それ故、可能性としての歴史の中に進歩を捉えなおす契機となっている点で、それがモダニティを無批判に受容する資本主義的文学形式との批判は当を得てはいないのである。

スーヴィンが、SFのもつ政治性に着目するのは、ノーヴムの有する歴史的可能性の故である。スーヴィンは「真の新しさ（a true novelty）」とは、作者の現実を支配する人間関係とは質的にまったく異なる人間関係を扱い、生み出す」（82）と表面的な単なるセンス・オブ・ワンダーを売り物にした疑似的ノーヴムを批判する。その上で、「真のノーヴムと疑似的ノーヴムとの弁別は、…SFにおける美的性質の鍵であるばかりか、政治的—倫理的な自由化を求める性格を理解する鍵でもある」と述べ、その変革に対して

常に開かれた性格を、最大に評価する。1997年の論文“Novum Is as Novum Does”の「小前提：SFと『科学の進歩』」と題した節において、ノーヴムの政治性をとりたてて強調しているのは、その故である。現下の資本主義（とりわけ新保守主義）がもたらした社会的問題を糾弾するスーヴィンは、資本主義に変わる社会形態はどのようなものなのかと疑問を投げかけ、SFには、きわめて粗悪な、軍国主義的、資本主義プロパガンダ的作品—換言すれば疑似的ノーヴムが支配的である作品—は多いが、優れたSFこそがこのような議論を推進するものであると主張する¹²。真のノーヴムとは、必然的に政治的可能性を開くものなのである。つまり、SFにおいて進歩とは、そのような政治的に開かれた可能性を意味している¹³。

進歩と資本主義に関連するノーヴムの認識論的機能をもう一つ提示しておきたい。ただしそれは補足的な機能であって、SFのノーヴムがもつジャンル論上の範疇化に積極的に関わる機能ではない。というのは、それがジャンルの弁別に資すると同時に、一部ではファンタジーや神話との共通性を示す可能性があるからである¹⁴。しかし、それでもなおここでそれを示すのは、その機能がSFの資本主義的性格に対する反駁の論拠ともなるだろうからである。

ノーヴムは定義的に認識的な作者の経験的規範からの逸脱である。それ故、常に経験的なものに移り変わってしまう可能性がある。例えば、月への旅行はどのようなものかすでにわれわれは知っているし、火星に高等生物が存在しないことも知っている。ノーヴムは作者と内包された読者の現実を異化（=estrangement）すなわち defamiliarize する基盤となるが、やがてはそれ自体が陳腐な（=familiar）仕掛けとなりかねない。SFとはそういう意味で消耗品であり、それ故、SFは「ハイ・リット（high lit）」ではなく、資本主義的な大量生産品に過ぎないという批判は、少なくともにしろ確かに存在する。スーヴィンが指摘するように、SFの大多数は

出版社の利益のために生産された消費財であろう¹⁵。

しかし、ノーヴムがもたらす逸脱の残滓は、たとえその作品が経験的な事象しか表わさなくなっていたとしても、常にそこに存在する。ただし、それが提供する認識論的経験は、スーヴィンがプロッホを引用しながら述べる「異化の真の機能」、すなわち「あまりに馴れ親しんだ現実の上に、衝撃的な、距離化をおこなう鏡をさしだすこと」（53-4）とは、もはやそれが衝撃的ではないという点で異なっている。しかし、そのようなノーヴムは、ファンタジー文学におけるファンタスティックなものと同じような効果を、なおそのSF作品に与えることができるだろう。ただし、SFの場合、読むという経験に対する影響力がファンタジーとは大きく異なっているのはいうまでもない。

その機能とは、物語世界の認識的秩序を不安定化することである。これは常にノーヴムが提供する効果であるが、陳腐となってしまったノーヴムであっても、それはかわらない。物語世界に、その時代の経験則に合致しない要素が組み込まれることによって、経験則が常に馴染みの規範性を有しているとは言えなくなるのである。ただし、言うまでもないことだが、SFの場合、それが認識的に叙述された世界で認識的に示されるノーヴムであるということが、神話やファンタジーのような非認識的ジャンルの場合と異なっている。非認識的作品の物語世界では、規範性の流動化には、特定の認識的理由や必然性は不要である。超常的（metaphysical）存在は何の説明もなく導入され、経験則と異なる事象は内包された読者の現実と直接の関係性を持たないか関係性が希薄である¹⁶。それに対してSFの場合は、経験則と異なる事象には認識的説明が付与される、あるいは、認識的説明を想定できる。しかし、いずれの場合にも、読者が経験的事実から想定できないような事象が発生する可能性が、物語世界内に常に存在している。

この機能によって、SFは、自然主義的ジャンルがSF的要素を組み込まない限り達成できない不安定な秩序を導入できる。SFのプロットやエピソードの帰結は、認識的であると同時に異形なものとなる可能性が常に存在する。読者は馴染み深い経験的事象が、未知の認識的説明によって全く異なる現象を導きかねないことを前提にして作品を読まざるを得ない。例えば、フィリップ・K・ディック (Philip K Dick) の『火星のタイムスリップ』(*Martian Time-Slip*)における分裂病患者の特異な能力が、過ぎ去った未来(1994年という設定である)や火星人の存在、もうすでにそれ以上のテクノロジーが存在している機械(テープ式録音装置など)といった陳腐化した仕掛けがふんだんにあるにもかかわらず、プロットにおいて重要な役割を果たせるのは、読者がその認識的説明を受け入れるべく、未来の火星という設定—もっとも大きなノーヴム—が、陳腐でありながらもなお経験則の規範性を流動化するという役割を果たしているからである¹⁷。

SFの歴史は他のジャンル—例えば叙事詩や悲劇—に比して、短いことは言うまでもない。スーヴィンの弁を借りれば、デカルト以前にSFは存在し得ないからである。たとえタイムマシンが発売されるようなことになっても、H.G.ウェルズ (H.G. Wells) の『タイムマシン』(*The Time Machine*)がSFのキャンノンから除外されることはないであろうが、当然、SFのキャンノンと呼ぶべき作品は限られている。ファラー・メンデルゾーン (Farah Mendlesohn) が、SFにはファンによるキャンノン(人気がある作品)とアカデミックなキャンノンがあると指摘するように、著名な作品といっても、SFの正典たり得るとは言えない状況にある¹⁸。しかし、SFが技術の進歩に伴って捨て去られる大量生産品であるとして、文学の正典から除外されるようなことがあってはならないのはもちろん、SFというカテゴリーにおいて、ノーヴムの陳腐化を理由に特定の作品を古典の地位から排

除することはできない。優れたSFは、文学史的な意味でも資本主義的消耗品ではないのである。

IV.

認識とノーヴムに関するよりジャンル論的な問題に戻ろう。SFにおいてノーヴムは、認識的に裏づけられていなければならない、かつ、それがSF物語の全体的で枢要な構造を提供することは既に確認した。しかし、その定義が狭隘に過ぎるという指摘がある。例えば、パリンダーは、ボルヘス (Jorge Luis Borges) の『記憶の人、フネス』(*Funes, the Memorios*)には、センセーションリズムを導入するという意味での疑似的ノーヴムではなくそれが認識的に適切な概念化を与えられないにもかかわらず、それでもなお認識的な機能を有するという意味で疑似的ノーヴムが認められるとして、スーヴィンの認識性を振りかざすノーヴムがいかにも狭量に過ぎると主張する。逆にこれをノーヴムであるというなら、つまり「もしこのこと(ボルヘスの例)がスーヴィンの変異形あるいは極端な例の一つであるとするならば、認識異化の理論が極端な例をあまりにもたやすく生み出すほど幅広くなっているのではないかと疑念を感じざるを得ない」というのである¹⁹。

認識的な概念化は、SFにおいて常に問題となり得る。ノーヴムが経験的に未知の事象でなければならない以上、十分に認識的な説明が与えられないまま、それを導入することがあるからである。例えば、スタニスワフ・レム (Stanislaw Lem) の『ソラリスの陽のもとに』(*Solaris*)の場合はどうか。ソラリスの海がもつ「生物学的」機能は認識的と言えるのか。カート・ヴォネガット (Kurt Vonnegut) のトラルファマドール星人の関わる『スローターハウス5』(*Slaughterhouse 5*)の時間の断裂はファンタスティックではないのか。これらが、ある時は革新的ノーヴムとなり、ある時はファンタス

ティックな非認識的ノーヴムに過ぎないとなるのでは、確かにノーヴムは曖昧な用語といえるだろう。

しかし、上記のボルヘスの例やヴォネガットの場合にみられるように、疑似的な一認識的概念化が困難な一ノーヴムが重要な物語の構造を支配している物語の場合、その疑似的ノーヴムの性格をもって当該作品の形式的ジャンル、つまりそれがSFであるか否か、を決定することはできない。SFの根底には、認識の枠内で物語するという性格と、経験的規範からの逃避の逸脱を前提に物語するという性格が同居している。それ故、ときに後者の性格が前景化した場合、非認識的でファンタスティックな印象を強く与えたり、前者の性格が反映された場合、SFというよりはむしろ自然主義の小説と位置づけられたりする可能性がある。SFという枠組みが提供するの、一つのノーヴムを取り上げて範疇化を議論できるほど単純な物語ではない。

パリンダーの指摘は、科学 (science) であり虚構 (fiction) であるSFのオキシモロンの性格を如実に反映している。言い換えれば、その主張は正しくもあり同時に誤りでもある。確かに、科学は「SFを取り囲む地平」(67)であり、それに立脚して認識的であるべきというスーヴィンの主張は、あらゆるノーヴムが完全な科学的説明にのっとると解釈するのであれば、限定的に過ぎるといえる。しかし、スーヴィンが認識的であることをことさらに強調する理由は、ファンタスティックなものをコントロールすること」がスーヴィンのSF観の根底にあるからであった。SF的な要素を含む物語をすべてSFとしようとする立場の批評家であれば、より寛容な定義に満足するであろうし、ファンタスティックな事象を、認識的に説明できると強弁して、SF的ノーヴムであると主張することもあり得る。

重要なのは、そのような弁証法的議論の中にあつて、スーヴィンのSFの定義がなお有効であるという事実である。境界的作品はいかなる

文学ジャンルにも存在し得るのであつて、それをもって形式的ジャンル論の不毛を主張することはできない。例えば上記のSFが形式からの逸脱に貢献することは、形式的ジャンル論以外から証明することができない、より正確には著しく困難であろう。より極端な逸脱の例を考えよう。パリンダー自身が認めるように、例えばヴォネガットの『タイタンの妖女』(*The Sirens of Titan*)は、SFが科学的認識に基づくということ自体のパロディでもある²⁰。SFは「息苦しい古い束縛からの逃避」(84)なのであるから、認識的なノーヴムがジャンル全体を支配すればするほど、その範疇化から逃れようとする作品が現れるのは自明である。それは、形式からの逸脱であるから、「ジャンル論的フォルマリズムの拒絶」の萌芽となるだろう²¹。しかし、それは形式が認識的に定められて初めて起こる逸脱である。認識的であることと虚構的であることの間にあつて、SFは常に弁証法の第三項であろうとする。そこには作者の現状と異なるものを提示しようとするSFのジャンルとしての形式の一貫性が存在しているのである。

注

- 1 Tom Moylan, "‘Look in to the Dark’: On Dystopia and the Novum," *Learning from Other Worlds*, ed. Patrick Parrinder (Durham: Duke UP, 2001) 53.
- 2 Darko Suvin, *Metamorphoses of Science Fiction: On the Politics and History of a Literary Genre* (New Heaven: Yale UP, 1979). 以下同書からの引用は、ページ数のみを記す。また、本稿において同書からの引用文中にある斜字体による強調は、すべて原文のままである。なお、引用に際しては同書の邦訳版の『SFの変容』、大橋洋一訳(国文社、1991年)を使用した。一部訳文を改めていることを付記する。
- 3 メタファーとノーヴムの相関性は、一方で、極めて有益な考察を創出していることにも注意が払われるべきである。例えば、パリンダーは現代社会のメタファーとしてのSF的社会について論じている。Patrick Parrinder, "Sci-

- ence Fiction: Metaphor, Myth or Prophecy," *Science Fiction, Critical Frontiers*, eds., Karen Sayer and John Moore (London: Macmillan, 2000) 12-3 を参照。
- 4 もちろん、この了承によってSFが定義されるわけではない。このような前提は、自然主義文学においても普遍的である。
- 5 Moylan, 54. モイランは、この批判を契機に、左翼はこれらの前提や枠組みを再考することとなったと合わせて指摘する。
- 6 Ursula K. Le Guin, "Science Fiction and Mrs. Brown," *Science Fiction at Large: A Collection of Essays, by Various Hands, about the Interface between Science Fiction and Reality*, ed., Peter Nicholls (London: Victor Gollancz) 26. スーヴィンの主題に関する論点は後述する。
- 7 Parrinder, "Revisiting Suvin's Poetics of Science Fiction," *Learning from Other Worlds*, 39.
- 8 ル＝グインの言うように、SFにおいても作品に描かれているのは現実的な人間である。もちろん例えば宇宙旅行の可能性そのものを描く専ら科学的知識の普及のためのSFがあり得ることを否定はしない。しかし、普遍的で広範な文学的な価値を有するに足るSFには、人間と現実についての洞察が不可欠なのは言うまでもない。
- 9 Krishan Kumar, *Utopia and Anti-Utopia in Modern Times* (Cambridge: Basil Blackwell, 1987) 45. ユートピア物語の史的発展とモダニズムの関連性については、拙著「イデオロギー的ジャンルとしてのユートピア」、『八戸工業大学紀要』、第22巻、99-110を参照。
- 10 SFにおける外挿に関わる諸問題については *Metamorphoses* の第2章3節に詳しい。
- 11 Darko Suvin and Marc Angenot, "Not Only but Also: On Cognition and Ideology in SF and SF Criticism," *Positions and Presuppositions in Science Fiction*, Darko Suvin (Kent: Kent State University Press) 45.
- 12 Darko Suvin, "Novum Is as Novum Does," *Science Fiction, Critical Frontiers*, 12-3.
- 13 SFの政治的ラディカリティについては、拙著「オキシモロンの考察：ある前衛的ジャンルについての試論」、『八戸工業大学紀要』、第25巻、pp. 251-61を参照。
- 14 ファンタジーや自然主義との弁別において、疑似的なノーヴムと認識性についての問題があるが、この点については、次章を参照。
- 15 *Metamorphoses*, vii あるいは、"Novum Is as Novum Does," 14などを参照。この点について、スーヴィンの主張は一貫している。その背景には、SFがファンタスティックな西部劇的物語を再生産していることへの批判があるのは当然だが、同時に paraliterature としてのSFに対する文学界の決して好意的ではない風潮に対する批判も含まれている。曰く、95%が取るに足らない作品であるとしても、残りの5%は「美的見地からいっても極めて意義深い」(vii) のである。
- 16 ただし、ファンタジーやファンタスティックな存在が支配的な作品であっても、現実的な人間を叙述できないというわけではない。例えば、ファンタスティックな事象を当然視する登場人物を配することで、人間的な葛藤を描くこともできるし、その人間的心理学が文学的価値を有するのは当然である。
- 17 パリンダーには、この作品の優れた分析がある。パトリック・パリンダー『SF 稼動する白昼夢』、大橋洋一他訳(勁草書房、1985年)187-91。
- 18 Farah Mendlesohn, introduction, *The Cambridge Companion to Science Fiction*, eds., Edward James and Farah Mendlesohn (Cambridge: Cambridge University Press, 2003) 10. SFの正典化に関する議論については、例えば、Carl Freedman, *Critical Theory and Science Fiction* (Hanover and London: Wesleyan UP, 2000) 86-93を参照。
- 19 Parrinder, "Revisiting," 44.
- 20 パリンダー『SF 稼動する白昼夢』185-6.
- 21 Parrinder, "Revisiting," 46.